

『鳴かない小鳥にいじわるなキス』

著：真崎ひかる

ill：鈴倉 温

彬親のところに居候させてもらうようになってから、十日が経つ。

大学の入学式も無事に終え、鷹晴にとって、なにもかもが今までとは違う新生活がスタートした。

これまで二人で生活していた母親とも別れて、慣れない都会の生活に不安でたまらなくなる……ということがないのは、間違いなく彬親の存在が大きい。

彬親に居候させてもらうことなく、あのまま母親と葉野氏との三人暮らしだったなら、たぶんもっと精神的に疲弊していた。母親と葉野氏に問題があるわけではなくて、鷹晴が一人で勝手に空回りして自分でストレスを発生させ……と、どうしようもない悪循環に陥っていたことが容易に想像できる。

「彬親さんは、そこまでわかってなかっただろうけど……」

優しく苦笑して、

「おまえはおまえで、気を遣ってんだよなあ。そこまで考えてやれなくて、悪かった」

そう口にする、そっと鷹晴の頭に手を置いた。あの時の優しい顔を思い出したら、胸の奥がギュッと痛くなる。

あの時点では、それほど長く話したわけでもなく、まだ互いをよく知らなかった。明確には想像していなかったとは思いますが、ぼんやりとでも鷹晴が陥る状態の予想がついていたのかもしれない。

もしそうだとしたら、やはり彬親は大人だ。

ただ、事前にほとんど家にいない……と聞かされていた通り、彬親は不規則な生活をしている。

大学が始まる前は、夕方に顔を合わせたり、昼前に帰宅した彬親と短く会話を交わしたりすることができた。

でも、入学式を経て鷹晴が大学に通うようになった今では、ほぼ完全に擦れ違いの日々となっている。

大学に慣れるのに一生懸命で、まだアルバイトを決められない鷹晴は、駅前や大学周辺を歩いて探索している段階だ。帰宅時間は、遅くても十七時そこそこで、その時間に彬親が部屋にいることはまずない。

「……ただいま」

今日も、鍵を開けて玄関に入ると、電気のついていない室内は静まり返っていた。玄関先に目を落としても、彬親の靴は見当たらない。

「彬親さん、三日も顔を合わせてない。今日も遅いのかなあ……」

しょんぼり肩を落とすと、帰宅途中に立ち寄ったスーパーの袋をガサガサ揺らしながら靴を脱いで、廊下に上がる。

玄関の照明を灯すと、自室のドアを開けてバッグと上着だけ壁際に置く。要冷蔵の生物を冷蔵庫に収めるため、足早にキッチンへと向かった。

リビング、キッチンカウンター……と、照明スイッチを押しながら移動して、冷蔵庫を開ける。

「あ、サンドイッチ食べてくれてる」

朝、学校に行く前にラップをして入れておいたプレートがなくなっていて、ホッと頬を緩ませた。

要冷蔵品を冷蔵庫内に収めてシンクを振り向くと、水切りラックに使用済みのプレートが立てかけられていた。

カウンターに書き置きしてあった伝言用のホワイトボードには、鷹晴の字で『サンドイッチ、よければ食べてください』と記してあり……その下に、彬親の字で『ごちそうさん。カラシマヨの卵焼きサンドが美味』と書かれている。

「よかった。口に合ったかな」

構わなくていいと言われていたので、余計なお世話かと思いつつ、自分のものを用意するついでにできる限り彬親の食事も作っている。

もし、手つかずでも自分の夜食にしてしまえばいい……と、彬親に疎ましがられる可能性も考えて予防線を張っていたけれど、夜勤で帰宅しなかった時を除いて、ほぼ食べてくれているのだ。

しかも、毎回短いながら感想を残してくれていて、次にホワイトボードを使うため消してしまうのがもったいないと思ってしまう。

「ホワイトボードじゃなくて、紙にしたらよかった。そしたら、残しておけたのにな」

そう後悔しても、使い捨てはもったいないからと伝言用ホワイトボードを買ってきたのは鷹晴なので、今更「やっぱり紙のメモにしよう」とは言い出せない。

「彬親さんの返事、消すの、もったいないなあ」

字消し用のスポンジを手にして、彬親の字をジッと見詰め……スッと息を吸い込むと、未練を振り払うように一気にボードをリセットする。

真っ白になったボードを目にして、やっぱり淋しいなあ……と小さく息をつき、カウンターの端に戻した。

シンクで手を洗って、カウンターのところに引っかけてあるエプロンを装着する。冷蔵庫に向き直り、扉に手をついて見えそうな食材はなにがあったか思案しながら、独り言をつぶやいた。

「キャベツと、玉ねぎ……人参、豚バラのブロックが安かったからしっかり買ってきたんだよね。うーん……ポトフにするかな。それなら、夜中とかでもレンジで温めて食べられるだろうし……ペンネを茹でておいて、温める時に足してもらおう。ペンネを入れなければ、スープとして軽く食べられる」

主食にしてもいいし、軽食にもアレンジが可能な、今夜のメニューが決まった。

冷蔵庫を開けて、収めたばかりの豚肉のパックを手にした。今度は野菜室のキャベツを出して、玉ねぎと人参は常温保存用のネットに入れてあるものから選ぶ。それら材料をシンクの脇に纏めて置いて、収納スペースから大きな鍋を取り出す。

この鍋も、包丁やまな板、細々としたその他キッチンツールも、鷹晴が選んで彬親が購入してくれたものだ。

冷蔵庫の中には、最初は飲み物しか入っていなかったのだが、今では鷹晴が買い込んだ食材や調味料が七割くらいのスペースを占拠している。

「初めて冷蔵庫を開けた時は、なんじゃこりゃ！ って、ギャグ漫画みたいに叫びそうになったもん」

一週間ほど前の衝撃を思い出して、思わずクスリと笑ってしまう。

あんな冷蔵庫内は、初めて目にしたのだ。

冷蔵庫そのもののサイズは一人暮らしにしては大きなものなのに、扉のスタンドスペースにはペットボトルのお茶とコーヒーが一本ずつ立てられているだけだった。

あとは、最下部の広いスペースに、飲みきりサイズの野菜ジュースのパックが三本と、エネルギーチャージを謳ったゼリー飲料のパッケージが一つ置かれていただけだったのだ。

しかも、野菜ジュースの賞味期限は三ヵ月前に切れていたというオチがつく。

「本当に、彬親さんはなにもしないし……他に、キッチンを使うような人も、いなかったんだなあ」

彬親が炊事をしないとは聞いていたが、他の人の手が入っている気配もなかったことに、少しホッとしてしまった。

マグカップや箸でさえ、彬親一人分しかなかったのだ。

それはつまり、自宅に頻繁に出入りするような、特定の親しい存在がない……ということだろう。

「恋人とか……葉野さんにはいないみたいなことを言ってたけど、外で逢ったら、わかんないよな」

初対面の時、ホテルのロビーで声をかけてきた彬親を思い出す。

躊躇する様子もなく自然な態度で、どう考えても、あんなふうに誰かを誘うことに慣れている雰囲気だった。

ホテルの部屋に誘おうと計画していたと聞かされて、「おれ、男だけど」と目を丸くした鷹晴に、笑って「男女どちらでもいいんだ」などと返してきて……。

仕事が忙しいという言葉は、疑っていない。

でも、もし……万が一、帰宅しない夜にどこかで誰かと朝まで過ごすとしても、鷹晴には彬親を責める権利などないのだ。

こうして一緒に暮らすようになってからは、なかったことにしよう、という言葉のまま……欠片も色っぽい空気を感じさせない。

あの夜、ホテルのバーで際どい接触をしてきたことが嘘みたいだ。

からかうように、「ことりちゃん」と言って頭を撫でてきたりはするけれど、それはあからさまに『子供扱い』で、言葉ではなく鷹晴は『対象外』なのだと思います。

今では、本物の兄弟みたいに接してくるのだ。

それが、嫌なわけではないけれど、

「あの日は、好みだなんて言ってくせに……完全になかったみたいな顔をして、平然と髪とか触ってくるんだもん」

鷹晴だけが、他愛もない接触にドキドキさせられている……。

彬親のことを考えながら食材を切り終えて、オリーブオイルとクレイジーソルトで軽く炒めて下味をつけると、あとは鍋で煮込むだけになる。

ペンネを茹でるのはもう少し後でいいだろうし、手持ち無沙汰だ。

「もっと、手の込んだメニューにすればよかった。んー……洗濯、しておこうかな。彬親さんの籠も、半分くらい溜まってたなあ」

洗濯が必要なものを入れておく籠は、鷹晴用と彬親用、二人分を別々に用意してある。

それぞれ、タイミングを見計らって自分で洗濯する……と決めているし、彬親にはやらなくてもいいと言われているが、彬親の籠に使用済のタオル等が溜まっていくのをただ見守るのはやるせない。

「二人分を纏めて洗濯したほうが、水道代とか電気代の節約になるし。よし、決定」

キッチンを出ると、洗濯機が置いてある脱衣洗面所へと足を向ける。

先日、自分の物と一緒に洗濯をした時は、申し訳なさそうに「悪い」と言われただけで余計なことをするなと苦情は寄せられなかったので、たぶん嫌がられてはいないはずだ。

スーツはもちろん、ワイシャツもクリーニングに出しているようだし、彬親の洗濯物はタオルの他に靴下や下着、ハンカチくらいしかないの、さほど多くない。洗濯機を回して干すくらい、大した手間ではない。

本当は、朝に干して陽光の下で乾かしたいけれど、彬親が休んでいる時に洗濯機の音を立てたくない。清音仕様になっていても、振動が伝わってしまう危険がある。

今から干しておけば夜のあいだに乾くはずだし、学校に行く前、仕上げに朝日を浴びてから取り込むことができる。

色移りしそうな物がないことだけ確認して、規定量の洗剤と一緒に洗濯機に投入する。柔軟剤をセットして、スタートボタンを押し……終了の電子音が鳴るまで、やることが無くなってしまった。

「……次は、どうしよう」

全自動洗濯機は便利でありがたい家電だが、ボタンを押した後は脱水が終わるまで待つしかない。

こちらの手持ち無沙汰を解消してくれないのが、残念だ。

「あ……れ」

ひとまずキッチンに戻ろうと廊下に出たところで、玄関のところから物音が聞こえてきた。開錠する音に続いて扉が開き……スーツ姿の彬親が入ってくるの見える。

パッと目を輝かせた鷹晴は、主人の帰宅を察知した犬のように、タタタッと小走りで玄関先に向かった。

「お帰りなさいっ。今日は早いね」

扉を閉めてこちらに顔を向けた彬親に、笑みを浮かべて声をかけた。こんなに早く帰宅するのは珍しいから、嬉しい……と、大きく顔に書いてあるはずだ。

玄関先で出迎えられるとは思っていなかったのか、鷹晴を目にした彬親は、あれ？ という顔をしてクスリと笑う。

「ただいま。今日は、出向もなかったからな。……エプロン姿で、お帰りなさいって出迎えとか、どの幼妻かと思ったぞ」

いつもと同じ、冗談をたっぷりと含ませた言葉だ。

そんなふう言いながら、鷹晴を見る目に疚しい色は皆無で、茶化すばかりの彬親をムッと見上げる。

「……お帰りのキス、しょうか？」

彬親は、どう返してくるのか……反応を待つ時間が、やけに長く感じる。

心臓が、トクトク鼓動を速めていた。震えそうになる手をギュッと握り締めると、指先が緊張で冷たくなっているのがわかった。

懸命に彬親を見上げていると、大きな手が頭に置かれる。

「ははは、ことりのキス……バードキスってか」

「っ！」

軽い調子でそんなふう言いながら笑われて、一気に緊張が抜けてしまった。消沈しそうになったけれど、負けるものかと気合いを入れ直す。

「そうじゃなくてっ」

「貴重な初キスを安売りするなよ」

彬親は、言い返そうとした鷹晴の頭をポンポンと軽く叩き、靴を脱いで廊下にかかる。

また、巧みにはぐらかされてしまった。

背を向けられてしまうと、もうなにも言えなくなる。歯痒さを抱えて、唇を引き結ぶしかない。

いつも、こうなのだ。

鷹晴が色恋を匂わせようとしたら、さり気なく逸らされてしまう。

「んー……なんか、いい匂いがするぞ」

ネクタイを緩めながら自室に入ろうとしていた彬親が、ふと足を止めてポツリとつぶやき、鷹晴を振り返った。

もう、振り向いてもくれない……廊下に置き去りにされると覚悟していたのに、そうして声をかけてくれたことが嬉しくて、パッと顔を輝かせた。

「あ、ポトフ煮込んで……そろそろできるけど、食べる？ ご飯、まだだよな？」

食べてくれる？ と尋ねるのは押しつけがましい気がして、おずおずと意思を問う。

彬親は、ほんの少し眉を顰めて嘆息した。

「俺のことは構うなって言っただろ……と説教モードに入りたいところだが、ありがたく食う。鷹晴の飯、ホントに美味いんだもんなあ。つーか、正直言うと当てにしてたから、なにも買ってきてない」

苦い口調で話し始めたけれど、言葉の途中で頬を緩ませる。

どうやら、勝手に彬親の食事を用意していることを疎ましがられてはいないようだ、安堵した。

「うん。すぐに準備していい？ ペンネを茹でようと思ってたけど……ご飯、炊こうか？ 早炊きモードなら、すぐに炊けるから」

「ああ。米が食いたいな。親父に知られたら、やっぱり鷹晴に家事をさせて……って怒られそうだ」

なんでもいい、ではなく……きちんと希望を言ってくれたことが嬉しくて、コクコクと小刻みにうなずいて彬親を見上げた。

「おれがしたいから、勝手にやってるだけなのに？ 葉野さんには、秘密にしてたらわかんないよ」

「そりゃそうだが。……秘密か。なかなか悪い子だなー」

笑いながら鷹晴の髪を撫で回した彬親は、

「先にシャワーを浴びるから、急がずゆっくりでいいぞ」

と言い置いて、今度こそ自室に入った。

廊下に残された鷹晴は、彬親に乱された髪を直してエプロンをギュッと握り締める。

「茶化して、全部……冗談にするんだもん」

お帰りのキスを言い出した鷹晴が、どれだけ勇気を振り絞って口を開いたのか……声が上擦らないよ

うに必死だったことも、彬親には伝わっていないに違いない。

本気で誘いかけて、険しい表情で拒絶されたら怖いから、必要以上に軽く振る舞う鷹晴も悪いのかも
しれないけれど……。

「もう一度好きって言っても、茶化されるのかな。……だろうな」

容易に結果の予想がつくから、彬親に面と向かっては言えない。

再会してすぐ、意地になったかのように告げた「好き」より、今のほうがもっともっと大きく育っ
ている。

だから、「気の迷いだ」などと返されるのが怖くて、告げられない。真剣に受け止めてフラれるので
はなく、きっと彬親は茶化して受け流そうとするのだ。

ぴつたりと閉じた彬親の部屋のドアは物理的にも精神的にも鷹晴を拒んでいるようで、目を逸らして
キッチンに向かった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>